

# 第1章

---

## 開発は何のため



ネパール・アンナプルナの子供たち

# 開発は何のため？

山形辰史

開発は悪か？

昨今、開発という言葉に良い印象をもつ人はあまり多くないようです。多くの人が開発という言葉から思い描くのは、ブルドーザーが山林を切り開いている様子や、ダム建設によつて環境が破壊されている様子ではないでしょうか。新聞では「開発」によつて先祖伝来の土地を追われる人々、失われる緑についてしばしば報道されています。今日、開発は発展途上国にとって必要のないこと、あるいはすべきでないことなのでしょうか。

幸福はどこにある？

アジアの発展途上国を旅することは、最近では特に珍しいことではありません。私たちがそれらの国々のスラムと呼ばれる地域や遅れているとされる農村を訪れたとき、私たちはしばしば、そこに住む人々、特に子供たちが、

明るく楽しそうに暮らしている姿を見出しします。また時には、彼らの生活から私たちが学ぶべき何物かを発見することもあります。

このような感覚を旅行者のセンチメンタリズムと片づけるのは皮相な見方でしょう。彼らがある面で、例えば精神生活の面で先進国の人々より豊かであることは充分考えられます。物質的に豊かでなくとも幸福な生活はあるでしょう。物質的な改善がなくとも、精神面の変化によって人がより豊かになれるなら、それ自体とても素晴らしいことです。例えばタイで開発僧と呼ばれる僧侶たちが、あるいは多くの宗教関係のNGOが試みていることの一部はこれに当てはまるでしょう。

開発は何のため？

しかし、それではやはり開発は必要ないのでしょうか。途上国の人々にとって生活の物質的改善は無用のことなのでしょうか。

私はそうは思いません。慢性的な栄養不良の子供が、先進国でなら死に至るとは思えない病気で命を失うとき、親たちは運命だとあきらめるかも知れません。しかし彼らが下痢をしている子供に、塩や砂糖を簡単に混ぜたスポーツドリンクのような水を飲ませること（経口補水法）でかなりの程度子供の命が救えることを知ったなら、おそらく彼らはそれを試みたいと思うでしょう。経済成長が進んだといわれるタイでも、農村では昼食におかず

抜きの子供たちがたくさんいます。彼らに対し学校が給食を行えたなら、子供たちは喜ぶのではないのでしょうか。給食がなくなると彼らは何とも思っていないかったかも知れません。しかしそれと、物質的な改善が要らないかということは別のことです。例えば、多産多死の社会では、そこに暮らす人々はそれを当然のことと考え、多産多死の状態から脱却することの必要性を意識することはないかも知れません。けれども、大きな苦痛をとまなわず、その社会の死亡率を下げる事ができることがわかったとしたら、その社会の人々はそれを望むのではないのでしょうか。

途上国の人々が入り用とする物質的な改善、社会の仕組みの変更に試みを、本書のなかで私は開発と呼びたいと思います。この意味での開発は途上国において依然として必要です。周期的に襲ってくる自然災害に対して無防備な住環境、雇用機会を生み出すのに十分な生産関連設備、人々の労働意欲をそぐような雇用システム、人々が潤いを感じる自然環境が知らず知らずのうちに蝕まれてしまう社会経済条件、現代文明や伝統文化を容易に享受できない社会環境、等々が改善されることを望まない人はいません。社会的弱者を保護するための制度や仕組み、傷病に応じた確な医療体制や施設などは、途上国の人がもしその存在を知らなければ自ら望むことはないかも知れません（例えば、参考文献の川田順

造「曠野から アフリカで考える」中央公論社、一九七六年、一七―三三ページを参照）が、いったん紹介されたら、誰もがその導入を歓迎することでしょう。

外から？内から？

現在の発展途上国はその多くが、今世紀初めには、現在のどこかの先進国の植民地とされていました。植民地経営によってその国の経済構造は変化を余儀なくされ、それは多かれ少なかれ旧植民地社会の経済的、精神的傷となつて残りました。また、植民地という立場を脱した後にも、旧宗主国をはじめとする先進国とのかわりには、直接投資、貿易、援助、戦後賠償等々の形で残存し、それらは植民地支配は終わっても、外国支配は終わっていないという印象を途上国の人々に与えることがありました。それが「開発」という名のもとになされることであれ、外部からのアプローチは、途上国の人々に好まれない歴史的経緯があるのです。

外部から隔絶された平和で安定した社会に外から異物が侵入し、その社会を悪いほうへ変えていく、という文脈で途上国の貧困を理解しようという試みがしばしばなされます。この考え自体は、歴史が示すように少なくとも真理の一端をついています。ここから得られる教訓として「外部の人々ではなく、その社会の内部の人々の主導権でもって開発を進めるべきだ」という主張が生まれるのはもっともなことですし、これは正しい主張である

と思います（鶴見和子・川田侃編『内発的發展論』東京大学出版会、一九八九年）。しかし、この内部の人々の主導権重視の発想は、外部の人間がまったく何もするべきではない、ということとは異なります。われわれ日本人が途上国の開発にかかわるとしたら外部からかわるしかないのですが、その際、その国の人々が望むことをするのはもちろん、人々が主役としてなんらかの形で参画できるような方式にするべきで、その方式が現在問われているのです。

何が誰にとって

望ましいか？

しかし一方で、どのような試みが人々にとって望ましいことを判断するのは難しいことです。ある目的からすると改善が期待される試みが、別の観点から見ると問題を引き起こすということもあるでしょう。

例えば、大雨になると道路が遮断され陸の孤島になってしまう村へひいた舗装道路が、建設の過程で由々しい環境破壊を引き起こすことがあるかもしれません。防災上の必要性から建議されたプロジェクトが、環境保全の観点から反対を受けるということは、現在の日本でも、長良川の河口堰、諫早湾の干拓等の場合に見受けられました。

また、ある人々にとって望ましい試みが別の人々にとっては望ましくないということが往々にして起こります。自然環境保護のための保留地の指定は、旅行者としてその自然の

美しさを享受する人にとっては望ましいことであつたとしても、その地に住んで動植物を採取して生活する人にとっては迷惑なケースもあり得ます。いくつかの国を流れる国際河川の上流にある国がダムを造つて水量を管理する場合、下流の国が望まない時期に上流のダムから水が放流されることもあるかもしれません。

これらのことからわかるように、どのような試みが開発と呼ばれるに値するかを判断するのは非常に難しいことです。悲しいことに、一部の人の人にとっては望ましく、別の一部の人の人にとっては望ましくない変革が、すべての関係者の合意が得られる前に「開発」として実行されてしまうこともあります。しかしこれらの困難の故に開発のすべての可能性を否定することは得策とは思えません。多くの関係者の納得が得られるような計画を時間をかけて探り、実行することが必要でしょう。

分配だけでは  
済まないか？  
さて、所得の低い人になんらかの物質的改善が必要であるとしましょう。  
しかし、そのような改善は、裕福な人から富を移転するだけでは済まない  
のでしょうか？

例えば、一九八〇年代初めに世界の穀物生産は一六億トンでした。この穀物生産のうちかなりの部分が家畜の飼料となり裕福な人がその家畜の肉を食べました。仮にこの穀物一

六億トンのすべてを直接の人間の食料としたら一〇〇億人以上の人間を養うことができるという計算があります（西川潤『人口』岩波書店、一九八三年、三二ページ）。ということは、裕福な人間が肉を食べることをある程度我慢して、その分の穀物を所得の低い人に分配したら、途上国の人々の栄養不良はすべて解決されることになります。これがもし可能ならば、現在以上の開発（この場合は物質的改善を意味する）の必要はなく、分配だけに配慮すればよいということになります。

しかし、この最後の結論には重要な見落としがあります。それは、もし裕福な人々に肉を食べるのをあきらめさせたなら、以前と同じ一六億トンの穀物が生産されとは限らないということです。生産量は分配の仕方に左右されます。努力が報われない分配システムのなかで生産活動が活発にならないことを、私たちは旧社会主義国の例によって知っています。とするならば、やはり、分配方法を変えることのみで貧困のすべてが解決できると考えるわけにはいきません。税体系、社会保障制度、民間の保険制度などを整備して、所得分配を改善することはもちろん重要ですが、同時に生産力の拡大がはからねばなりません。



開発経済学へ

のいざない

これまで述べてきたように、途上国の人々の生活を向上させるために依然として開発は必要です。しかし、人々が自立して十分な生活の糧を得るためにどんなことがなされるべきかについての完璧な答えはまだありません。研究者も、政策担当者も、NGOも、皆手探りで、その時々にも最も良いと思われるやり方をとっているにすぎません。開発にかかわっている人々すべてがこれからも、それぞれに悩み、議論をしながら答えを編み出していかなければならないのです。

本書は、経済学の立場から開発を考えた入門書です。本書を通じて、読者の皆さんが開発のさまざまな側面を理解し、開発を考えるわれわれの輪のなかに入っていただければ幸いです。

〈参考文献〉

川田順造『曠野から アフリカで考える』（中公文庫）中央公論社、一九七六年。

中村尚司『人びとのアジア——民衆学の視座から』（岩波新書）岩波書店、一九九四年。